

2月22日～23日に、広島県で開催された第47回全国青年団結集会に、富良野市労連青年部から、泉が参加したので報告します。

開会にあたって、賃金下げを発端とした日本経済の「負の循環」を断ち切るために、労働組合、企業規模、雇用形態などの枠を超えた労働者の学習と交流を通して、働くものとしての視野を広げ、連帯を形作っていくという目的が確認されました。

様々な講演や取り組みがありましたが、ここでは分散会の内容を中心に紹介します。泉が参加した第24分散会では、社青同1名、自治労4名（うち保健師1名）、民間のバス運転士、小学校教諭、工場作業員各1名の計8名で話し合われました。互いに他の人の職場実態に強い関心を持って臨むことができましたが、それは様々な職場の人間が一同に集まったため、業務内容がそれぞれ違っている一方、労働者であるという一点で同じ立場だったからだと思います。

例えば、バス運転士は基本賃金が安いので超勤が奪い合い状態となっているが、小学校教諭は超勤手当がほぼゼロという違いがある一方、この2つの職場はどちらも管理職が強権的で不合理な職場運営をしている実態がありました。バス会社では天候上危険で運行を取りやめるべき状況でも管理職が中止の判断をしづったり、小学校ではあまり意味をなさない数字的な評価が横行していることなどです。

## 立場の違う仲間と協力するのはなぜだろう？

この二人をはじめ様々な立場の人の意見を聞いていると、ここが立場の違う労働者が話し合う場だということ強く実感しました。

日本全国の仲間が集まり、立場の違う労働者が協力し合う（その前段階として交流を深める）意味とは何でしょうか。まず、春闘の結果は公務員の賃金にも影響するのだから、公務員も民間のことをよく知って協力しようということがあります。他に自分なりに考えてみたところでは、一つの会社が社員の待遇を良くすれば、収益が減って短期的にはほかの会社に負けてしまうと



徳島の仲間（右）と交流

というようなとき、多くの会社が歩調を合わせて社員の待遇を良くするとすれば、会社としてもそれを受け入れやすい、というようなこともありそうです。

さらに、立場が違う（＝利害関係が違う）労働者同士は実際にどこまで協力できるのかということも気になりました。これに関しては、全体会で広島電鉄の組合の取り組みの歴史を紹介していたのが考える助けになりました。正規職員の待遇を下げることを通じて、非正規職員の正社員化を成し遂げた事例ですが、立場が違うどころか、一面では利害が対立する間柄同士が協力した例です。ここで正規職員が非正規職員に協力した主な理由は「この状況が進めば非正規職員がさらに増加し、組合内でも正規職員の意見が力を失ってしまう」というものだったそうです。

もちろん、この例がどんな協力の理由付けにもなるわけではありません。集会の終盤で佐々木自治労本部青年部長が話していた「閉塞感が強い社会情勢で諦めを感じてしまうことも多い」中では、心を開き輪を広げる活動は抵抗感があるし、利害も絡んでくるためやはり難しいです。しかし、広電でも協力関係が固まるまでには、幾度となく組合員の間で話し合いがなされ、互いの立場に対する理解が深まる過程があったといいます。このように話し合いを重ねることがあらゆる仲間同士の協力に欠かせない「方法」なのだと思います。

私たちの間でも、世代の違いや正規・非正規の違いがあるし、青年部内でもそれぞれの仕事内容は違って、そこに生じる悩みも違って、周りの仲間がどんな風に仕事しているのか、普段から気にかけてみると、いざというとき互いに助け合うことができます。それは日頃の業務でも役立つことなので、あまり組合活動と意識せずに取り組んでみたらいいなと思いました。（泉）

## 日頃から周りの仲間の仕事や職場のことを気にかけることが第一歩！

3月4日に全国団結集会の報告会を行いました。

報告会では、様々な職種の方と職場実態について話し合った内容が紹介されました。お疲れ様でした！！



真面目に聞いています

